輝け商店街（9）

日専連名誉講師 富山短期大学名誉教授
川中清司

国の認定第一号となったユニークな「串と団子」構想

富山市の中心市街地活性化基本計画は、平成一九年二月八日に国の第一号として認定された。

その骨子は「串と団子」に例えられて、ユニークで分かりやすい。

富山市の郊外には、いくつかの集落がある。北には水橋、岩瀬、四方、西の呉羽、婦中、南に不二越、南富山、そして大山、大沢野、八尾などがある。

これらの生活拠点を団子に見立て、それぞれの地域を振興させ、住宅整備を支援する。それを結ぶ交通網を串に例え、団子と串をうまく機能させ、調和した発展を図る。

目標は「車に頼らない、歩いて暮らせるコンパクトなまちづくり」。富山市が目指す理想の都市構想は説得力があり好評だ。

大同合併で得た地域の共通意識

富山市は、平成一七年四月に七市町が合併し、四二万人の新富山市が誕生した。それぞれが、地域の中心拠点をもっている。

富山商工会議所と元の商工会（水橋、呉羽、和合など）が残っていた。みんなが歩調をそろえ、活性化計画に賛同してもらうことを願っていた。計画の初めから関係地域に参加してもらい、智恵と力を借りた。

青森市の場合、コンパクトシティー構想の立ち上げに長い時間を要したのは、中心地だけ良くなっても、という周辺地域との意見調整に手間取ったからだ。

決して富山市の中心市街地だけのエゴではない。基本には、全地域の広域発展を目ざす理想があった。関係地域がその理解を固めたところに富山方式の特徴がある。

中心地の充実で「団子づくり」

都市機能が集中する中心地の充実を図る。各地域の「団子」から「串」の交通機関を利用して中心部に人びとが集まる。徒歩圏の活性化から始める。

中心地には専門店、娯楽など、いろいろな生活利便と、行政、金融、医療など、公共福祉の機能を集積させる。その密度が高まれば、全体のまち機能も総合的に高まる。

銀行へ行き、ショッピングを済ませて、夜の総菜を買う。すべて徒歩とバス、中心市街地で用が足せる。人が行き交えば賑わいが増し、それがさらに活気を生む。

弱まる中心地 急増する行政コスト

平野部に位置する富山市は、戦後一貫して郊外部の開発を続けた。そのため市街地が拡散し、中心部の人口密度は、四一・二人／㌶、県庁所在地のうちで最も低い。

今後、ますます人口が減り高齢化が進む。そのうえ、中心地の活力が弱まり、税収の減少が懸念される。一人当たりの行政コストは急激な増加が見込まれ、このまま拡散が続くと、二〇年間で約一八九億円もの追加費用が必要となる。

「串づくり」はライトレールと市内電車

串づくりの中味は、三つの柱が仕組まれている。まず、ライトレール、次が、JR高山線の社会実験、そして、市内電車の環状線化だ。

ライトレール（LRT）が、一八年四月末に開業した。

次世代型路面電車といわれるこの電車は、バリアフリーの低床車両構造で、車イスやベビーカーでも楽に乗り入れできる。新しい電停も設けたので乗降頻度が高い。道路の混雑が緩和されCO₂の削減が期待される。

富山ライトレール

運賃は均一区間制で大人二〇〇円、小学生以下一〇〇円、未就学児は大人一人で二名まで無料。PASMOを買えば便利だが、現金でも、もちろん乗れる。

高齢者の外出機会が増え、自動車からの転換でライトレールの平日の利用者は、約二二〇〇人から、約五〇〇〇人に増えた。

JR高山線の本数増加

高山線は、旧五市町村をつなぐ重要な交通軸である。この積極活用を図るため、本数を増やし、終電時間を延ばした。

さらに、各駅からはフィーダーバスを運行し、無料駐車場を設置するなど相乗効果をねらっている。

市内電車の環状線化

従来まで、JR富山駅から出ている南富山までの線があった。これをさらに充実して、富山駅周辺地区と中心商業地区のアクセスおよび、全体の回遊性を強化する。目標を平成二一年度内に設定した。国際会議場前から平和通り、新大和百貨店から西町の元大和前へと結ぶ。

こうして、充実した市内の交通網。駅前、主要な街角などの結節点での乗り降りを増やし、車での乗り入れを減らす。

基本計画の三本柱

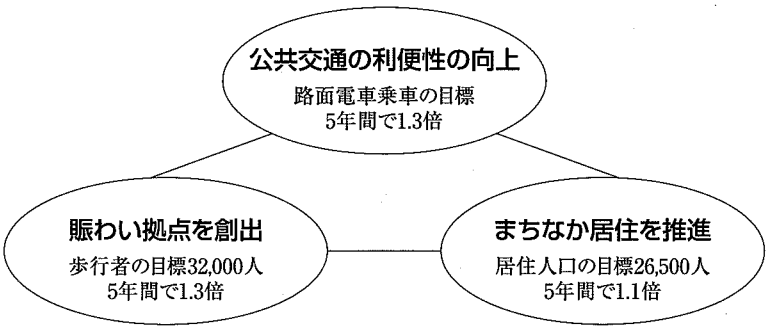
基本計画は、次の大きな三つの柱を掲げている。

①公共交通の利便性の向上
・これまで事業所、公共施設の郊外移転や少子化で、通勤、通学者が減った。
・市内電車の環状線化などで利用者を増やす。
・路面電車市内線の乗車人員を、五年間で一・三倍、平成二三年には、一日当たり一万三〇〇〇人にする。

②賑わい拠点を創出
・中心部のスーパーや百貨店が閉鎖したり、郊外大型店の開設によって、まちなかを歩く人が減った。
・百貨店の移転をはじめ、いろんな賑わい施設で歩行者の量を増やす。五年間で一・三倍、平成二三年には一日当たり三万二〇〇〇人にする。

③まちなか居住を推進
・今まで減り続けてきたまちなか人口が、昨年四三年ぶりに増え始めた。これからも、まちなか居住推進事業などを進め、人口増加に取り組む。
・五年間で一・一倍、平成二三年には二万六五〇〇人にする。

計画区域は約四三六㌶で、富山駅周辺と中心商業地区の総曲輪・中央通り・西町を含めた地域となっている。



新幹線を視野に意欲

北陸新幹線の開設が平成二六年度末に予定されている。

東京への時間距離が縮まれば、客足が東京へ流れるマイナスの面もでてくる。隣接の金沢市も手強い競合相手。現在は特急で四〇分弱。さらに一〇分も短縮されれば、大きな流出要素となってくる。

それまでに、中心市街地の活性化に取り組み、もっとインパクトの強い富山の魅力を創り出さねばならない。関係者の間に強い意欲がみなぎる。

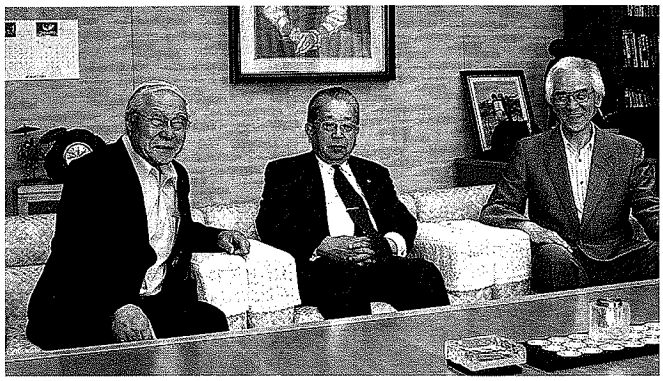
幅広い人脈と協力で実践スピードを上げる

ここしばらくの間に、公会堂が駅北へ移転し、市民病院も南に移り、日赤や済生会病院も郊外へ移転した。「郊外に公共施設を移したのは行政じゃないか」、「今頃、コンパクトシティーと言っても」と批判の声も聞かれた。

富山の場合、行政と経済界の連携がスムースだった。その結びつけ役が商工会議所。市議会とも呼吸を合わせ、原案づくりの段階から一緒に参加してもらった。

実践派の人材がそろった。日専連富山理事長であり、価値プロ委員長の瀬戸徹さんは富山商工会議所の副会頭を七年間務めた。富山商工会議所専務の濱谷元一郎さん、市商工労働部長の松井幹夫さん。完璧な理論づくりよりも、行動の中から組織を固めようと、一緒にまちづくり計画を築き上げてきた「戦友」だ。

行政なら施策の一つひとつに議会の承認が要る。だが、まちづくり会社なら、トップを先頭に思い切って断行できる。県・市から予算と人材も投入された会社は、面倒な手続きは要らない。実践スピードが加速した。



左から、日専連富山　瀬戸理事長、富山商工会議所　濱谷専務、筆者

価値プロの活動がまちづくり計画の源

まちづくり計画を完成させた原動力に価値プロがある。価値プロは富山市の価値を創造するプロジェクトチームだ。「もっと輝く富山市をつくろう」と、平成一四年一月に特別委員会が発足した。富山商工会議所が提唱し、委員長は瀬戸徹さんが務めた。

「行政任せの時代は終わった」「市民や民間の手で、富山の価値を創ろう」と、具体的な五つの行動を始めた。いろいろな活動成果が認められ、平成一五年には北日本新聞社の地域社会賞を受賞した。

合い言葉を掲げて進む

価値プロが掲げたのは、次の五つの合い言葉だった。その一つひとつを実現にむけて走りだした。

○いい仕事、もっと
もっと面白がろう
本気で面白がれば人は集まる
それが価値になる
○もっと探しだそう
時代の光を当てれば
隠れた価値が輝きはじめる
○もっとほめ合おう
応援してくれるから
価値創造の勇気が生まれる
○もっとつながろう
価値と価値が融けあって
町全体の価値になる
○もっと語り継ごう
価値が共感をつむぎ
感動が次の担い手を育てる

プロジェクトに市民が参加

価値プロは、多くの活動をくり広げ、多くの市民が参加した。「やればできる」「こんな、すばらしい富山があった」と人びとに自信を蘇らせた。

平成一六年四月二五日、富山駅北口に一万人が集まった。「駅北ムーブ二〇〇四春」は、砺波チューリップ七万本、四二万枚の花びらで地下広場を埋め尽くした。人通りが少なく、暗いイメージの広場や地下通路まで、明るく賑やかなムードに一転した。

毎年四月、全国のチンドンマンが富山に集まり、路上芸と巧みな口上を繰り広げる。昭和三〇年に始まったこのイベントに、さらに素人コンクールなど新しい企画を加え、「富山の価値」として定着、発展させており、二〇万人を超す人びとに笑いと感動を与えた。

平成一六年秋、市の中心を流れる松川の塩倉橋に描いた「夢の架け橋」。幅一七㍍の巨大なキャンパスに、鮮やかな色彩の子どもたちが作った細い銘板を貼り付け、市民に感動を与えた。「顔のある街」づくりの一環として注目を集めた。

「ふるさと博士」にチャレンジ

市民がもっと富山のことに関心をもち、まちの魅力を再検証してもらおうと、昨年市民に「越中富山ふるさとチャレンジ」（いわゆるご当地検定）の実施を提案。

実行委員会を設定して、ひろく参加を呼びかけた。昨年一一月に行った第一回検定には、三三〇〇名が受検した。

富山には、豊かな海、山、川があり、人びとの生活の中に息づいている。地域の自慢話、とっておきの話題、みんなして掘り起こすのがねらいだ。

たとえばこんな問題。

☆「富山市出身の横綱は？」

梅ヶ谷」「その土俵入りの型は？＝雲竜型」

☆「越中で初めて川筋堤防を築いた戦国武将は？＝佐々成政」

☆「小学校時代を富山（大沢野町）で過ごしたノーベル賞受賞者は？＝利根川進」

食伝統と和食薬膳の専門料亭

富山市は売薬が有名で、薬都と呼ばれる。市民の食生活には良き伝統がある。たとえば健康に良い昆布の消費量は日本一多い。昆布は「よろこんぶ」で縁起も良い。

士気を鼓舞する、元気が出ると、ほとんど毎日の食卓に登場する。医食同源。食事と健康のつながりは密接で、食すなわち薬という思想が古来からあった。

富山に伝わる薬膳料理がそれを受け継ぐ。東町には和食薬膳の専門料亭・川柳がある。

調理長の大島政文さんは、「料理はおいしく、美しければ良いという時代は終わった。今、薬膳を勧めることで、健康と長寿を保つことを願う」と、この道をひたすら歩んできた。富山の豊かな食材と漢方の薬効までも見据えている。

富山は食文化のメッカ

「キトキト」は富山弁で新鮮でおいしいこと。富山の魚はキトキト、実にうまい。市内の大衆食堂やおでん屋などでも、さしみ、煮物、焼き物、酢の物などの魚料理が、いつでも食べれる。駅弁でも、曲げ物に入った鱒ずしが年中買える。

結婚、出産、初老、還暦など人生の節目節目には、めでたい（鯛）、よろこぶ（昆布）、といった語呂合わせと共に、料理に幸せの願いをこめる。

食は人の体を養って癒すもの。自然の恵みに感謝し、自らの命を長らえると共に、世の中に尽くすためにいただくもの。富山には、食を喜び尊ぶ文化が息づいている。「医食同源」の考え方には禅に根ざした、奥深い哲理がある。

工夫されたまちなか拠点 立体駐車場や交流サロン

まちを歩くと、随所にアイデアを活かした拠点に出会う。中央通り振興組合が主催するAOZORAさんぽーろは、四階建ての立体駐車場。一階の休憩室は明るい雰囲気で、いつでも自由に使え、レストランムードのきれいなトイレが併設されている。

AOZORAさんぽーろ1階の交流サロン

その、ほんの近くにある一一〇坪の敷地は、長崎屋が撤退した跡だが、今は日専連富山が駐車場を経営し、一八台が止められる。

中央通りの真ん中にある「樹の子」は市民の交流サロンで、第三セクターの「まちづくりとやま」が経営する。総合案内所と手作り商品の販売コーナーもある。市民が自由に利用できる商品棚があり、アクセサリー、袋物など小物商品がいっぱい並んでいる。ほとんどが手作り主体で人気がある。

二階では、親子の交流サロンや授乳、おむつ換えコーナーもある。一八年度の入館数は五万人を超えた。玄関前では、採れたての青物や呉羽ナシを売っていた。

環境条件が富山市民の強さを生む

雄大な立山連峰を仰ぎ、清らかで豊富な神通川に身をさらす。富山市民の志の高さと意志の強さは、このなかで育まれてきた。急峻な立山と日本海に注ぐ急流が黒四ダムと豊富な電力をつくりだした。背丈をこす積雪と狭い耕作面積。その厳しい条件を克服するなかで「勤勉」を生んだ。

売薬は江戸時代から続き、家庭配置薬は、今なお日本一だ。富山市まちづくりの熱い闘いは続く。

総曲輪通りには空き店舗などない。ないと言うより作らないのだ。その土台には、必死の努力の積み重ねがある。この九月の完成を目標に「総曲輪クエリオ」の建設が進む。ここには地元の専門店と一・六倍に増床した大和百貨店が入る。

「グランドプラザ」が前に設けられる。六五メートル×二一メートルの広大な空間。屋根も壁もすべてが全面ガラスのフリースペース。正面には、大型テレビジョンを据えて映像を流すステージ感覚。街のオアシスとしての空間だ。これらの施設が集客と賑わいづくりの中心拠点としての機能を充実させていく。